

## エミリーの誤読

羽澄直子

Misreading Miss Emily

Naoko HAZUMI

『エミリーに薔薇を』(William Faulkner, "A Rose for Emily" 初出は *Forum* 誌1930年4月号掲載)は、南部の田舎町ジェファーソン (Jefferson) の住人でこのほど74歳で亡くなったエミリー・グリアソン (Emily Grierson) という未婚女性の生涯について、町の人々があれこれ語るという形式で進行する。エミリーを「エミリー・グリアソンの生涯」というテキストの作者とみなすなら、町の人々はいわばそのテキストを解読する読者である。しかしこの解読作業は容易なことではない。なぜなら読者の読みと、作者の意図の間にはしばしばギャップが生じるからだ。思いもよらぬ作者の意図に遭遇するたびに、読者は自らの誤読に気づかされるのである。

町の人々がエミリーのテキストを読む際に用いるキーワードは「貴婦人 (lady)」である。このキーワードに基づいたエミリー像を想定しながら彼らはテキストを解読しようとするのだが、「貴婦人」に対する概念は世代によって多少の違いがある。まずエミリーの若いころを知る世代、つまり南北戦争以前の南部社会を古き良き時代として懐かしむ世代にとって、貴婦人とは優雅で誇り高く、男性に大切に保護される存在であり、また過去の誇り高き南部の象徴でもある。父の庇護を受け、誇り高きグリアソン家の娘であるエミリーはまさに貴婦人の条件を備えていた。しかし貴婦人の保護者たるエミリーの父は、町の人々の想定よりも少しばかり乱暴で高慢すぎた。そこで町の人々は2人に対して次のようなイメージを抱くようになった。

We had long thought of them as a tableau, Miss Emily a slender figure in white in the background, her father a spraddled silhouette in the foreground, his back to her and clutching a horsewhip, the two of them framed by the back-flung front door. (123)<sup>1</sup>

娘に近寄る青年を片っ端から追い散らし、戸口に立ちはだかることで娘が外へ出ることを阻止する父は、保護者というよりは抑圧者、一方白いドレスを着た娘は暴君によって捕らわれの身となった無力で無垢な貴婦人である。捕らわれの貴婦人は助けを求め、白馬の騎士によって救出されるのが物語の常である。ところが現実のエミリーは、父親同様町の人々の想定よりもいささかかたくなで高慢すぎた。実際に誰かが勇敢にも救出の手を差しのべたのかどうかは定かではないが、とにかく白馬の騎士になれた男は結局いなかったのである。誤読に気がついた人々は、彼女の父親が亡くなった時、おそらく腹いせに次のような意地の悪いことを言う。

When her father died, it got about that the house was all that was left to her; and in a way, people were glad. At last they could pity Miss Emily. Being left alone, and a pauper, she had become humanized. Now she too would know the old thrill and the old despair of

a penny more or less. (123 下線筆者)

なるほどこれまでのエミリーはお高く止まりすぎて一種浮世離れした存在であったが、乞食同然で1人取り残されれば、日々の暮らしに煩わされ人並みに苦労し、「人間らしく」なっていくだろうと町の人々は考えた。しかしその言葉とは裏腹に、どうも彼らは彼女が「人間らしく」なることを望んでいないようなのだ。なぜならエミリーを読む際のキーワードはあくまでも「貴婦人」だからだ。彼らは落ちぶれたエミリーが他人の施しを求めざるをえなくなったこと、従って自分たちが彼女に施しができるようになったことがうれしくてたまらない。今度こそエミリーは没落した薄幸の貴婦人であり、誰かが彼女を保護して貴婦人の体面を保ってやるというテキストの読み方が可能となるのだから。彼らにとって貴婦人とは世間の荒波から守られるべきものだ。貴婦人は日々の暮らしに煩わされ人並みに苦労などしてはいけないし、周囲の者（紳士又は騎士）は貴婦人をそんな境遇にさらしてはいけないのだ。ではなぜ貴婦人に苦労をさせてはいけないのだろうか。その答えは、町の人々がもっともらしい理由をつけてエミリーの税金を免除してやったことによく示されている。税金免除の意味とは、父の代わりに町が貴婦人の保護者の役目を引き受け、「貴婦人が経済的に独立するなどということは考えられもしないし、したがって許されもしないし、可能でもないという事実を公に宣言した」（フェッタリー 75-6）ことに他ならない。つまり貴婦人とは、生活能力に欠けるものという烙印を押され、敬意は払われてもまともな人間扱いをされない存在なのだ。貴婦人に生活の苦労をさせてはならないのは、貴婦人には苦労に耐えられる力がないと見なされているからだ。町の人々は父の圧政からようやく解放されたエミリーが自立した1人の人間として生きる可能性など全く考えもしない。逆境を乗り越えてたくましく生きのびる貴婦人など存在しないのだから。エミリーに苦労を経験させずに貴婦人のままでいさせようという試みは、一見結構な慈善行為に見えるが、実は町の人々が彼女を「人間らしく」させないと決めたことを意味しているのだ。

町の人々の期待どおり、今回のエミリーは貴婦人らしくふるまった。彼女は税金免除の恩恵を拒まなかった。父の死を彼女が頑として認めず、その結果埋葬が遅れたことも、いかにも現実感覚の乏しい無力な貴婦人のやりそうなことだった。そんな彼女に対して新しい保護者は鷹揚に理解を示す。

We remembered all the young men her father had driven away, and we knew that with nothing left, she would have to cling to that which had robbed her, as people will. (124)

ところがしばらくして人々はまた自分たちの誤読を知ることとなる。エミリーは道路工事の監督をしているヤンキー（北部人）、ホーマー・バロン（Homer Barron）とつきあい始めたのだった。貴婦人が素性の知れない北部の日雇い人夫とおおっぴらに出歩く——もちろんこれは貴婦人にはあるまじき行動である。このエミリーの大胆な振るまいに対する町の人々の反応は世代によって、あるいは性別によって異なっていた。年寄りと女性はあくまでもエミリーに貴婦人としての規範を求めようとする。彼らは“even grief could not cause a real lady to forget noblesse oblige”（124）、あるいは“it was a disgrace to the town and a bad example to the young people”（126）と言い、エミリーの行動を阻止しようとした。一方比較的若い世代と男性は、逆にエミリーを貴婦人扱いすることをやめようとする。何せ彼女は本物の貴婦人ならするはずのないことをしているのだから。ホーマーと出歩く彼女について彼らは次のように言う。

She carried her head high enough—even when we believed that she was fallen. It was as if she demanded more than ever the recognition of her dignity as the last Grierson; as if it had wanted that touch of earthiness to reaffirm her imperviousness. (125)

堕落したにもかかわらず相変わらず高慢な態度のエミリーは、揶揄の対象でしかない。だが彼女を貴婦人扱いしない人々は、代わりにエミリーとホーマーの恋愛を応援するようになった。今やエミリーは恋する1人の女にすぎないのだから、相手が誰であれ彼女の思いがかなえられれば（結婚できれば）それでいいのではないか。貴婦人という枷をはずされたおかげで、ようやく彼女も生身の人間と見なされるようになったと言えるだろう。ところがホーマーは突然姿を消し、エミリーの恋は終わりを告げる。すると一旦は彼女を自分たちと同じ人間として扱い、その独立性を認めた人々は、再び彼女を保護してやらねばと考えるようになる。結局のところエミリーは男に捨てられ面目を失った、あわれで孤独な老嬢なのだから。かくして町に保護されたエミリーは再び貴婦人としてとり扱われ、過去の不行跡は不間に付される。彼女の家へは娘たちが陶器の下絵描きを習いに行かされる。これはお稽古事に名を借りてエミリーに金銭的援助を施すための措置に他ならない。

時は流れ、若い近代的な考え方を持つ世代が町のバックボーンとなってきた。最初彼らはエミリーを特別扱いすることに不満を抱き、彼女に税金を払うよう要求した。誰かに庇護され世俗の苦労と無縁であるべき優雅な「貴婦人」の存在など、若い世代には認め難いのだ。これは一見生活力のない老嬢に対する無慈悲な仕打ちに見えるが、結果的には彼女を「人間らしく」人並みに扱うことにもなる。ところがエミリーはこの要求をにべもなくはねつける。彼女は“*I have no taxes in Jefferson*” (121) と言い張ることで、この件に関しては自分は「貴婦人」扱いされるべきだと主張するのだ。税金の取り立てに失敗した彼らは、それを正当化するためにエミリーを以前どおり「貴婦人」と解釈せざるを得なくなる。こうしてエミリーは“*a tradition, a duty, and a care; a sort of hereditary obligation upon the town*” (119) として前の世代から次の世代へと引き継がれて、貴婦人として存在し続けることとなる。しかし前にも述べたように、「貴婦人」に対する概念は時代とともに変わっている。若い世代は貴婦人に古き良き時代を投影したりはしない。彼女は“*dear, inescapable, impervious, tranquil, and perverse*” (128) と形容されるような、むしろ目障りな前世紀の遺物である。むろん騎士道精神にのっとって貴婦人を保護するのではない、いわば朽ちていく文化遺産を保存するようなつもりで貴婦人を取り扱うのだ。ガレージや工場の中に取り残されたエミリーの館は、“*lifting its stubborn and coquettish decay above the cotton wagons and the gasoline pumps — an eyesore among eyesores*” (119) と描写されているが、これはまさしく“*a fallen monument*” (119) と町の人々が呼ぶエミリーの姿そのものである。彼らが目にするエミリーには、いつもそそり立って相手を不遜に見下すような印象がある。たとえば町の議員団が税金の支払いを要求しに彼女の館を訪れた時、彼女は立ったまま彼らの話を聞く。時折窓辺に映る彼女の姿は“*her upright torso motionless as that of an idol*” (123)、“*like the carven torso of an idol in a niche*” (128) である。若い世代は白い服を着た華奢で天使のようなエミリーを知らない。今の彼女は黒い服を着たぶくぶく太った老女へと変貌を遂げている。

She looked bloated, like a body long submerged in motionless water, and of that pallid hue.  
Her eyes, lost in the fatty ridges of her face, looked like two small pieces of coal pressed into a lump of dough as they moved from one face to another while the visitors stated their errand. (121)

こんなエミリーの姿から浮かび上がる貴婦人像は、時代遅れでグロテスク、ロマンスとはまるで無縁なしきものである。

ところで『エミリーに薔薇を』では、町の人々の語りによって進行する形式のため、エミリ

ーの肉声をじかに聞いたり内面に踏み込むことはむずかしいのだが、町の人々が誤読を繰り返しながらエミリーを解釈していく過程からエミリーの意図を読み取ることは可能である。「貴婦人」らしからぬ行動をするエミリーは、自分が生身の人間であることをアピールし、自分を貴婦人という枠に納めたがる人々をあざ笑っているようだ。一方人々の読みに合わせて「貴婦人」らしくふるまうエミリーは、そうした方が都合がよいからわざと貴婦人のテリトリーに逃げ込んでいるような感がある。たとえば税金免除の措置を黙って受入れ、後にそれが取り消されそうになると「貴婦人は理性的ではなく現実感覚もない」(フェッタリー76)という人々の読みを逆手に取ってかたくなにその要請を無視する。法律で規制されている砒素を買うときも「貴婦人とは人間以下で、法以下」、従って「超法的存在」である(フェッタリー78)という立場を利用して強引に手に入れる。こうして見るとエミリーは無力で浮世離れしたお嬢様どころか、現実的な計算のできる案外したたかな女性ではないかとも思えるのである。

実は雑誌掲載時には削除されたが、手書き原稿、タイプ原稿には、町の人々がいかにエミリーを誤読していたかということをあからさまにするような箇所が設定されていた。それは病の床につくエミリーが男の黒人の召使のトービー(Tobe)と語りあう場面なのだが、そこには町の人々の視点は介入せず、人々の目には決して触れないエミリーとトービーの姿が描かれている。<sup>2</sup> 高慢で近寄りがたく浮世離れした貴婦人エミリーの面影はない。彼女は自分がこれまで何をしてきたか、また町の人々が自分をどう見ているのかということをよく認識し、自分というものを冷静に見つめているようだ。いつもそそり立つイメージを人々に与えてきたエミリーは古びたベッドに横たわり、主人に対して口をきかなくなったと人々が思っているトービーに話しかける。父の死後トービーに給料を払えなくなった彼女は、館を彼に譲るという遺言を35年前に作り、自分が死んでも彼が生活に困らないように取り計っていた。彼が先に死んだら、金板に彼の名を彫った柩に彼を納めて埋葬するという約束もしていた。父が亡くなつて彼女が乞食同然になった時、町の人々はこれで彼女も世俗的な苦労をして人間らしくなるだろうと言ったものだが、そのとおり確かに彼女は人間的な思いやりのある態度をトービーに対して示していたのだ。また長年エミリーに仕えて黙々と働いてきたトービーにも、若いころはシカゴへ行って一旗あげたいという夢があった。いまエミリーと共に年老いた彼は、貧救院に入つて日向ぼっこしながら汽車を眺めていたいと言う。2人の会話からは老人の寂寥感が滲み出でているが、同時に長年に渡る主従関係から生まれた強い人間同士の絆が感じられる。しかしこの2人の会話で注目すべきは、エミリーが長い間締切りになっていた2階の部屋について言及している部分であろう。タイプ原稿には次のような記述がなされている。

“But not till I’m gone,” she said. “Don’t you let a soul in until I’m gone, do you hear?” . . .

“Hah,” she said. “Then they can. Let’em go up there and see what’s in that room. Fools.

Let’em. Satisfy their minds that I am crazy. Do you think I am?” . . . “Let ’em go up there

and open that door. And you wont be the last one, either. Will you? (William Faulkner Manuscript Vol. 9 210-11)

作品の結末で明らかにされるのだが、2階の開かずの部屋は埃まみれで、ベッドには白骨化した死体が横たわっている。しかも死体の横に並べられたもう1つの枕には頭の形のくぼみがあり、灰色の髪が落ちているというショッキングなおちまでつく。出版された決定稿では上記のエミリーのセリフは削除されているので、2階の部屋は作者エミリーによる予告もなしにいきなり公開されることとなり、死体発見の衝撃度はより高くなった。

この死体がエミリーを捨てて逃げたと見なされていたホーマーのもので、どうやら彼をこん

な状態に至らしめたのはエミリーらしいということはすぐに察しがつく。それにしてもよく40年間ホーマーの死と彼の死体が発見されなかったものだ。秘密の露顕を妨げた要因としては、まずエミリーが町の人々を遠ざけて孤高を保った生活を送っていたこと、彼女と外界をつなぐ唯一の存在だったトービーが極端に無口であったことがあげられるだろう。しかしさらに決定的な要因は、人々がホーマー失踪前後のエミリーの行動を例によって「貴婦人」をキーワードにして解釈したことにあるのではないだろうか。彼らの解釈を検証してみると、エミリーを貴婦人扱いしなければ事件は未然に防げたかもしれないし、発覚も早かったのではと思われる点がいくつか見られる。

まず砒素購入の件だが、薬剤師がエミリーの理不尽な強引さに負けたことは前にも述べた。しかしそれに加えて、彼が使い道を聞かずに砒素を売ったのは、エミリーが自殺すると考えたせいもあるのではないか。まさか貴婦人がねずみ駆除のために毒薬を自分で買いにくるとは思えない。その頃にはもう町の人々はホーマーに結婚の意思がないことを知っていたので、結局捨てられる運命にあるエミリーが、貴婦人としての誇りを守るために自殺するのは妥当だという意識が働いたのではないだろうか。事実彼女の砒素購入を知った町の人々は、彼女は自殺するのだろう、そして“it would be the best thing” (126) と言いあったのだ。しかしエミリーは死なず、ホーマーは消え、ほどなく彼女の家から悪臭が漂うようになる。人々は悪臭の原因を女ではなく男の召使が台所仕事をしているせいだ、あるいは召使が庭で（おそらく例の砒素を使って）殺したへびかねずみのせいだと考えた。これはあながち的外れな見解とは言えないだろう。いくら彼女が傲慢で風変わりだからといって、人殺しをしかねないとすぐに彼女を疑うような者はいないだろうから。問題は彼らが悪臭の原因をエミリーに問いたださず、追及もしなかった点にある。法的手段に訴えても何とか臭いを止めさせろという要請に対し、市長は“will you accuse a lady to her face of smelling bad ?” (122) と答え、夜こっそりと人をやってエミリーの家の周りを消毒させるのである。エミリーに対しては一言も苦情を言わず、悪臭だけを取り除いたのだ。こうすれば貴婦人の名誉は傷つかず、彼らも貴婦人に面と向かって恥をかかすような気の進まない仕事をしなくてすむ。さらには隣人たちの文句も抑えられる。まさに一石二鳥どころか三鳥の措置である。やがて悪臭は消え、騒動はおさまる。かくしてエミリーの完全犯罪は成立した。

しかし町の人々はタイプ原稿のエミリーが言うように本当にばかで、単なる見当違いから誤読をして結果的にエミリーの完全犯罪を助けたのだろうか。彼らは本当に何も異変に気づかなかつたと言えるのだろうか。何せ住人が互いに相手を知り尽くしているような、詮索好きな小さな田舎町のことである。実は町の人々はエミリーの館の中に入る機会がほとんどなかったにもかかわらず、2階に何かがあるということをうすうす勘づいている。彼らは淡々とした語りの中にさりげなく2階の謎をほのめかすのだ。たとえば議員たちが税金の問題でエミリーの館を訪ねる場面には “They were admitted by the old Negro into a dim hall from which a stairway mounted into still more shadow” (120) という描写があり、2階に何か不吉なもの（さらに暗い陰）が存在することを印象づけている。エミリーが自宅で陶器の絵付けの教室を開いた時のことでも、わざわざ “She fitted up a studio in one of the downstairs rooms...” (128) と語り、2階の部屋は使わない（使えない）ことを匂わせている。彼女の晩年を語る際には、2階が封鎖されたことをはっきり述べている。

Now and then we would see her in one of the downstairs windows——she had evidently shut up the top floor of the house——like the carven torso of an idol in a niche, looking or

not looking at us, we could never tell which. (128)

さらに彼らの語りを注意深く聞いてみると、実はすでにホーマーと悪臭の関連性を読み取っていた可能性すら浮かび上がってくる。たとえばエミリーの館の悪臭にまつわる出来事が語られたあとに、かつてエミリーが父の埋葬を3日間拒んだエピソードが披露される。つまり彼女には死体放置の前歴があり、それは町の人々には周知の事実なのだ。しかもこの悪臭は「原因はねずみかへびの死骸」と彼らが見なしたことからもわかるように、生き物が死んで腐っていく臭いなのだ。以上の点から彼らが悪臭を誰かの死体のせいだと推理したとしても不思議ではない。では死体は誰かというと、それは諸事情から判断すればホーマーしかありえないのだが、死因については明らかにされたわけではない。にもかかわらず人々はホーマーは殺されたと判断した。なぜならもしホーマーが病死あるいは事故死したと考えたなら、彼らはエミリーの父の死亡時と同じように、何とか彼女を説き伏せて埋葬させたはずだからだ。彼らにはか弱い貴婦人に人を殺せるはずがないという思い込みがある。しかしもしそのような貴婦人がどうしても人を殺さなくてはならないとすれば、どんな手段を選ぶと推測できるだろうか。まず思いつくのは非力な者でも容易にできる毒殺であろう。そしてエミリーは貴婦人の特権で毒薬を簡単に手に入れたのだ。

町の人々はエミリーが砒素でホーマーを殺害して、2階の部屋に置いていたことを知っていたのではないだろうか。知っていたからこそあえて彼女の館の悪臭をねずみかへびのせいにして、館内（とくに2階）の詮索もしなかったのではないか。そうだとすれば彼らは貴婦人の犯罪を暴きたてないことにして、あくまでも貴婦人工ミリーの保護者に徹すると決心したのだ。古い世代は南部貴婦人の名誉を守るために、新しい世代はやっかいではあるが先祖代々伝わる文化遺産を守るために、ホーマー失踪事件に関しては意図的に誤読したのだ。腐敗臭でもってそれが元は生き物であったことを強烈にアピールしている死体は、それをそんな状態に至らしめたエミリーが生身の人間であることを生々しく代弁しているように見える。しかし町の人々は腐敗臭を押さえ込み、（彼女にとってはおそらくありがたいことに）彼女を貴婦人のテリトリーに押し込め、事件を闇に葬った。もし何らかの形で事件を公表せざるを得なくなった時は、エミリーは気が狂っていたと言えばよい。グリアソン一族には狂気の遺伝があるとのことだし（彼女には気のふれた大叔母がいた）、貴婦人扱いするということは、その女性は常識を受けつけない変わり者だという烙印を押したようなものだからだ。貴婦人工ミリー・グリアソンが犯罪を犯しても、それは狂気のせいだということにすれば、彼女の名誉には傷はつかないのである。さらにホーマーが北部人だったということも、町ぐるみでエミリーの共犯者になろうとした要因の1つと考えられる。この事件には南部人の北部人に対する複雑な感情が反映されていると言えないだろうか。

次の記述は、人々がエミリーが亡くなるまでは事件に触れないという暗黙の了解のもと、長い間好奇心を押さえていたことを示している。

Already we knew that there was one room in that region above stairs which no one had seen in forty years, and which would have to be forced. They waited until Miss Emily was decently in the ground before they opened it. (129)

おそらく予期したとおり彼らは死体を発見し、ホーマー失踪に関する彼らの解釈が正しかったことを確信するのだろう。そして正しい解釈をした上での「善意の誤読」によって、エミリーを最後まで保護できたことに満足するのだろう。しかしあエミリーがホーマーの死体をどう扱ったかということまで解釈できた者はいただろうか。枕に残された1本の髪の毛は、新婚用に飾

## エミリーの誤読

りつけをされた部屋で彼女が死体となった夫の傍らに横たわっていた時期があったことを暗示している。テキストの中に解読不能な箇所を仕掛け、何もかも解読したと思い込んだ町の人々を最後に驚愕させてあざ笑うエミリーの姿がここに見えるような気がする。

### Notes

1 テキストは *The Collected Stories of William Faulkner* (London : Penguin Books, 1989) を使用。引用は以後文中のかっこ内にページ番号を示す。

2 “A Rose for Emily” の手書き原稿、タイプ原稿は、*William Faulkner Manuscript Vol. 9* に掲載されている。エミリーとトービーの会話部分について Michael Millgate は “Not only would the retention of this material have diluted the final episodes and too long delayed the climactic revelation, but the direct presentation of Miss Emily, the preferred insight into personality and motive, would have greatly diminished the fruitful ambiguities of the narrative and the situation and tended to undermine the emphasis on the central theme of withdrawal into unreality and illusion.” と述べ、決定稿でそこが削除されたのは適切な判断だと結論づけている (*The Achievement of William Faulkner*, 264)。

### Works Cited

- Faulkner, William. “A Rose for Emily.” In *The Collected Stories of William Faulkner*. London : Penguin Books, 1989.
- Fetterly, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*.  
(『抵抗する読者—フェミニストが読むアメリカ文学』) 鵜殿えりか, 藤森かよこ訳.  
名古屋：ユニテ, 1994.
- Gwin, Minrose C., *The Feminine and Faulkner*. Knoxville : The Univ. of Tennessee Press, 1990.
- Gwynn, Fredeick L., and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Charlottesville :  
the Univ. of Virginia Press, 1959.
- Harari, Josué V., ed. *Textual Strategies: Perspective in Post-Structualist Criticism*. New York : Cornell Univ. Press, 1979.
- Harrington, Evans, and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner and the Short Story*.  
Jackson : Univ. Press of Mississippi, 1992.
- Jelliffe, Robert A., ed. *Faulkner at Nagano*. Tokyo : Kenkyusha, 1956.
- Polk, Noel, ed. *William Faulkner Manuscript Vol. 9*. New York : Garland, 1987.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. Lincoln : Univ of Nebraska Press, 1978.
- Wadlington, Warwick. *Reading Faulknerian Tragedy*. Ithaca : Cornell Univ. Press, 1987.
- 川崎寿彦. 『薔薇をして語らしめよ』. 名古屋：名古屋大学出版会, 1991.
- 小山敏夫. 『ウィリアム・フォークナーの短篇の世界』. 京都：山口書店, 1988.
- 進藤玲子「“A Rose for Emily” の語りについて」. 『アメリカ文学研究』21 (1984), pp. 35-47.
- 松本守. 『フォークナーの女性』. 東京：成美堂, 1994.